

馬 睿涓  
MA Ruijuan



野生

金属、樹脂、紐、プラスチック



## 野生

犬は家畜になる前にオオカミ族の一種で、野生動物として存在していた。今、私たちが見ている「かわいいわんちゃん」の祖先は数千万年前には野生動物としてとても凶暴だったのかもしれないし、人類は容易には近づきにくい存在だったのではないか。「かわいいわんちゃん」を撫でたいと思う人たちは、目の前の犬がかつて凶暴だった姿を想像し重ね合わせるなど日常的にはなかなかできないはずである。犬は犬として人に飼い慣らされてから穏やかになり、親しみやすくなる。つまり、遠い存在だった生物が身近な生物の「犬」になったのである。

今回、選んだ視点は「巨大」と「獣性」の二つだ。私は強大な生物に対する畏敬の念を抱かせる試みをした。

人によって怖いものは違うが、「未知」という属性が備わっている。例えば、巨大な空間や物体に直面したとき、私たちは無意識に自分の体のスケール感のようなものと比較して対峙している。このものは自分の命を脅かす可能性があるという考えが生まれるので、畏敬の気持ちがある。

獣性はすべての動物体(人間を含む)が持つ特性であるが、現代社会に生きる人間の獣性は進化とともに失われていく。本来人間は、自然と多くの生物の前では小さく弱い存在であったはずだ。しかし、人間は科学技術で日常的な暮らしまでハイテク武装している間に、獣性の恐ろしさを忘れてしまった。

この作品は、鉄という硬くて冷たい材質で犬の形を作った。どんなに「かわいいわんちゃん」でも野性的な獣性を秘めた一面があると思っている。

大きな鉄製のフレーム状の犬の内部には樹脂と紐が充填してある。動物の肉、内臓を模したものを樹脂で封入した。樹脂と樹脂の間は、赤いと青い線で繋げている。全体は解剖図のイメージを観覧者に持たせたい。封入した肉は犬自身のものなのか、食べたばかりで消化されていない他の生物なのか、人によって考えが違うかもしれない。

今日では多くの人間が自然界への畏敬の念を欠いているため、様々な動物が不平等に扱われる悪質な事件が発生している。私は、この『野性』という「かわいいわんちゃん」の赤裸な姿を通じて、「人間はすべての生命体を尊重すべきで、命は人に任せることができるとは思わない」という考えを表現したいのである。